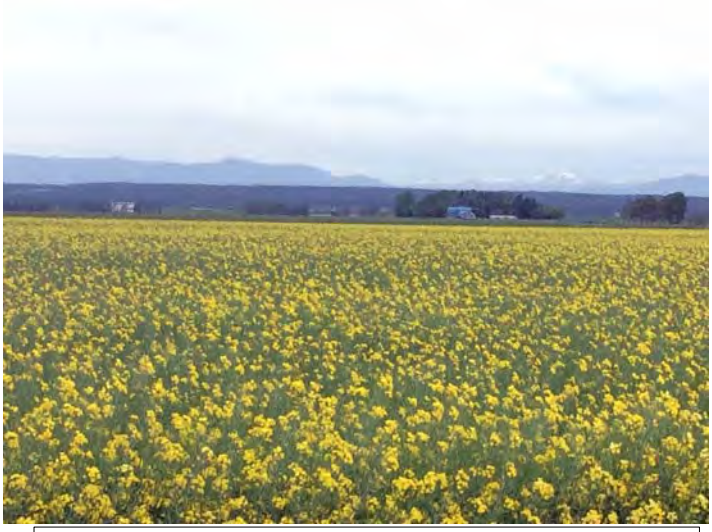
2019.6.8
No.213

編集・発行人　樋口みな子
E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送年間1,500円）

一瞬一瞬を大切に全力を尽くしたい



5.30 初夏を伝える色鮮やかな菜の花畑（南幌町で）

５月２８日に川崎市で起きた小学生たち２０人が刺され２人が亡くなった事件には、言葉を失いました。突然、切りつけらた子どもたちの恐怖は想像もつきません。どこにいても、安心して暮らせる社会はもう望めないのだろうか？とやり切れない思いでいっぱいです。

５月に元号が変わり、延々と続いた「令和」礼賛報道に違和感を覚えました。私には「命令に従わない者は和を乱す」としか解釈できません。報道が一色に染まるのはおかしくないですか？もっと報ずべきことがたくさんあるはずなのにと思いました。

５月の連休は、家の近くの自然公園を散歩しただけで、ほとんど遠出はできせんでした。夫のリウマチが悪化し、一度は「手術の準備はできている。どうしますか？」と主治医から問われ「もう少し考えさせてください」と抗生物質で様子を見ることになりました。その手術は人工関節を取り除き、片腕の自由を失うものなのです。治る確証も得られぬまま不安な日々を過ごしました。結局、先日の受診で「手術せずに現状維持でいきましょう」との判断に私はホッとしました。手術で一番心配だったのは「生きる意欲が無くなる」ことだったからです。樹木希林さんのようにあるがままを受け入れる心境にはとてもなれず、「歳をとるとは死に向かって歩むことなんだ」と実感しました。抗生物質投与の耐性菌も心配で、今後の見通しはまったく分かりませんが、家族で今を大切にしていこうと思っています。

「レイチェル・カーソン北海道の会」から講演の依頼がきました。さまざまな市民運動に関わってきましたが、専門的な知識があるわけではなく、一度はお断りしました。「銀河通信の３０年を語ったらいいですよ」と助言されて５月２３日、北大遠友学舎でお話ししました。タイトルは「レイチェル・カーソンの精神と『銀河通信』」です。

３０年間の「銀河通信」から、出来るだけ今の時代につながっている、平和や環境、原発、人権問題の紙面を選んでパワーポイントに入れ、それに沿って話を組み立てました。講演には市民運動で出会い、読者になってくださった方たちが多数参加（８０人）してくださり、補助椅子まで出すほどでした。

準備が大変でしたが、手書きの頃の通信から、当時の情熱や、一生懸命、深夜にペンを走らせていた頃を懐かしく思い出しました。インターネットが普及していなかった時代、読者からのお便りもメールではなく手紙でした。遠方の方から手紙に託した感想に何度も励まされました。良き時代でしたね。

２ページに読者の高橋儁（しゅん）さんが当日の様子を写真も入れてレポートを書いてくださいましたのでご覧ください。

５．２３レイチェル・カーソン生誕１１２年記念「講演と音楽の集い」で（撮影：石井一弘さん）

自分塾 2019・5・23(木)　『銀河通信』主宰　樋口みな子さん講演

演題「レイチェル・カーソンの精神と『銀河通信』」

2016年までは遠友夜学校の受講生として、友人の池川氏や吉田氏と毎週一回、遠友学舎に通って様々な講義を受講しておりました。衛生研究所の横に車を置き、北大構内に入り、てくてくと歩きながら大学の野球場を横目にしながら、獣医学部の側を通りテニスコートでの学生さんの練習風景を見ながら遠友学舎に辿りついた日を思い出します。今回縁が有りまして、遠友学舎に足を運ぶ機会を得ました。「銀河通信」の主宰者、編集人であります樋口みな子さんの講義が遠友学舎であるとの事で演題は「レイチェル・カーソンの精神と『銀河通信』」であります。

レイチェル・カーソン

レイチェル・カーソン氏については不勉強で知りませんでしたが、ちょっとおさらいをして、環境保護運動の創始者的アメリカ生物学者であることが分かりました。樋口さんの講義は「銀河通信」を30年以上も発行し続けられ紆余曲折の歩みをされ、インタビューされた多くの人々との思い出を語られ、とても感慨深いものが有りました。特に今回は敗戦後の満州から幼子一人を中国人に託し、決して母として名乗り出ないとの悲痛な思いをして日本に引き揚げられた半ドキュメンタリー的小説「約束の夏－約言」の作者「若松みき江」さんとのインタビュー会見のお話を是非お聞きしたいと思って参加致しました。若松さんのご主人とはある会でご縁があり、ご一緒させて頂き様々な事を学ばせて頂いております。勿論この本についてもご紹介頂き仲間内で読み合わせし感動したものです。樋口さんの講演で取り上げて頂き嬉しい限りです。（高橋儁）

脱原発のドイツ倫理委員会報告
ミランダ・シュラーズさんの講演を聴いて

２０１１年３月１１日、福島第一原発事故はドイツの原発推進方針を１８０度変えました。ミランダ・シュラーズさんは倫理委員会のメンバーで、現在、ミュンヘン工科大学で環境気候政策教授です。

６月２日、聖公会札幌キリスト教会で開かれたミランダさんの講演要旨です。

原子力の倫理問題については、もっと以前から長い議論がありました。福島の事故前には原発稼働を急いでやめることにはかなりの反対がありました。倫理委員会は、原子力エネルギー利用に伴うリスクを考えました。放射能放出の可能性、スリーマイル島やチェルノブイリや福島のような破局的な事故の可能性、放射性廃棄物の貯蔵、そして核拡散などの問題です。原発が安全なら、なぜ多くのエネルギーを消費している都市ではなく、遠く離れた田舎に建設されるのでしょうか。農村に住む人々の命の価値は、都市の人々と異なる扱いを受けていいのでしょうか？　委員会で話し合われたのは、将来の世代に、放射性廃棄物などの未解決な問題を残しながら、たくさんのエネルギーを消費する生活スタイルを楽しむことが正しいのかという疑問でした。福島の大規模な事故が起きた現実から、目を背けることができないと判断したのです。倫理委員会の公開イベントは１００万人の市民が見てくれました。

ドイツの２大政党は長い間、原発推進でした。でも緑の党が躍進し、社会民主党と緑の党の連立政権（１９９８～２００５）が新しいエネルギー政策を打ち出しました。そのことも大きかったです。

日本では再生可能エネルギー、風力発電による低周波音等で健康被害が各地で問題化し、訴訟が起こされていることに対して、ミランダさんは「ドイツではトラブルはあまり無いようです。風力発電を市民が買って、地域で作っています」と答えました。２０２０年までに、電力の３５％を再生可能エネルギーで賄う目標を持っています。エネルギーの大転換のコストはかかりますが将来への投資だと言います。未来を見据えた政策に感動しました。論議が市民に共有されているのが素晴らしいですね。日本も見習いたいです。

ミランダさんは節電も心掛けています。冬の間は冷蔵庫を使わず、野菜などは涼しい場所に保管して電力の２０％を節約したそうです。ドイツの目標は低炭素エネルギーへの転換のようです。持続可能な雇用や持続可能な生産と消費の実現と話されました。

環境保護の先進国ドイツから、日本も学んで、脱原発に舵を切ってほしいと思います。福島の事故から国も電力企業も研究者も多くの国民も、何も学んでいないのはとても恥ずかしいです。

映像ジャーナリストの西嶋真司さんが大戦中の従軍慰安婦問題を報道して不当な非難・攻撃を受けた元朝日記者植村さんの闘いの日々を描いたドキュメンタリー映画「標的」の完成が近づいています。西嶋さんをインタビューしたハンギョレ新聞の記事を紹介します。

西嶋真司さん（撮影・パク・ソア記者）

ハンギョレ新聞　2019.5.29

「右翼の『植村バッシング』ドキュメンタリーを作るため局を辞めた」

「ドキュメンタリー制作をやめるか会社を辞めるかの二者択一をしなければならなかったです。あの時、今作らなければ後悔すると思いました」

西嶋真司監督は昨年、福岡に本部を置く民営RKB毎日放送を辞めた。入社３７年目であり６５歳の定年を４年残した時点だった。「元朝日新聞記者の植村隆氏に向けた“ねつ造バッシング”をテーマにドキュメンタリーを作ると提案書を出しましたが、会社では受け入れませんでした。今、日本の民間放送で『慰安婦』問題を番組で扱うのは難しい。それで直接ドキュメンタリーを制作しようと思い辞表を出しました」。

１９日午後、ソウル孔徳洞(コンドクドン)のハンギョレ新聞社で西嶋監督に会った。彼は二日前に「韓日学生フォーラム」に参加する日本の学生たちを率いて韓国を訪れた。インタビュー前日には5・18記念式が開かれた光州(クァンジュ)も立ち寄った。

『標的』。彼が4年残した会社生活と引き換えにしたドキュメンタリーのタイトルだ。植村記者(現カトリック大学招聘教授)は１９９１年８月１１日、日本軍「慰安婦」被害事実を初めて実名公開証言した故・金学順（キム・ハクスン）さんの記事を朝日新聞で報道した。金さんのソウルでの記者会見に三日先立った初の報道だった。その後、被害事実を知らせる証言があふれ出し、長い間埋もれていた日本軍「慰安婦」の歴史の実体が明らかになった。

そして２３年が経ち、日本の右翼の「植村叩き」が始まった。慰安婦ではなく「挺身隊」という表現を使ったなどの理由で「ねつ造記者」とされた。最初に報道されたときは、日本のメディアでも「挺身隊」と「慰安婦」の単語が交ぜて書かれたが、植村氏の記事だけを狙って脅迫したのだ。この影響で植村記者は任用が予定されていた日本の大学教授雇用契約まで取り消された。

なぜ「植村ドキュメンタリー」なのかと聞くと、西嶋監督は「おかしい」という表現を使った。「私は１９９１～９４年にRKB毎日放送と同じ系列の東京放送の韓国特派員を担当しました」。彼は記者として入社し、２００１年にプロデューサーに職種を変えた。日本ではよくあることだという。「特派員の時

植村記者の記事が出ました。私も一緒に『慰安婦』の記事を書いたんです。『挺身隊として連れて行かれた』という表現は私も書きました。ところが２０年以上過ぎて、植村氏だけを攻撃するのでおかしいと思いました。４年前、ちょうど福岡に講演にきた植村記者と初めて会い、ドキュメンタリー制作の意思を明らかにして許諾を受けました」

このドキュメンタリー企画案は昨年、日本の国際ドキュメンタリーのピッチングフォーラムである「Tokyo Docs」で共同制作支援対象の15作品にも選ばれた。「日本のオンライン・クラウドファンディングのプラットフォーム『A-port』で４月にファンディングを始め、現在１９０万円を超えました。８月までに３５０万円を貯めようと思っています。制作は今年中に終わらせるつもりです」

西嶋氏はプロデューサー時代、日本が犯した戦争の歴史を扱ったドキュメンタリーを主に作った。太平洋戦争時、日本軍のマレーシア・コタバル侵略を扱ったものが代表的だ。「戦争は私が必ず記録しなければならないテーマ。日本にはまだ知られていない歴史があります。日本人のほとんどが太平洋戦争は真珠湾攻撃から始まったと思っているが、防衛省の資料を見ると真珠湾攻撃より一時間前にコタバルを攻撃しています。しかし、日本が東南アジアで戦争を起こしたという暗い記憶を消すために、コタバル侵略を教えない。ドキュメンタリーを通じて日本が米国と同時に東南アジアでも戦争を起こした歴史を知らせたかったんです。昔から権力者は歴史を自分に有利なように歪曲するから」

彼が2年前に作ったドキュメンタリー『抗い記録作家林えいだい』は、韓国教育放送の「EBS国際ドキュメンタリー映画祭」で上映されている。一昨年９月に死去した日本の記録作家の林えいだい氏は、日本が犯した強制動員の歴史を粘り強く追跡し、数冊の本を出した。「韓国の方々がドキュメンタリーを見て、知らなかった強制連行の歴史を教えてくれてありがとうと言ってくれました」

彼は歴史について関心を持つようになったきっかけが「韓国特派員として働いていたとき」だと語った。「ソウルで歴史を正確に伝えることの重要性に気づきました。１９９０年代初頭韓国で民主化運動が拡散する時期でした。焼身自殺も多く目撃しました。韓国で国家権力が歴史を自分たちに有利に変えてしまうのをよく見ました。その時、『権力とメディア』、『歴史の伝達』というテーマについて多く考えるようになりました」

記者時代の１９９７年に、彼が閉鎖された福岡の三池炭鉱の歴史を扱ったドキュメンタリーを作ったのもそのような省察の結果だった。この炭鉱は、日帝強制占領期（日本の植民地時代）に徴用された多くの朝鮮人労働者を死に追いやった場所だ。このようなドキュメンタリーへの情熱を見て、放送社からプロデューサーに職種を変えることを勧めたという。「記者には客観的な報道を求めるでしょう。記者として一人の人物や事件を粘り強く追跡する『ドキュメンタリー制作』は簡単ではありません」

「韓日関係が以前に比べてよくない」という西嶋氏に「どうすればいいか」と聞いた。「日本側から事案を眺めたい。日本の国家権力が歴史を正しく伝えようとしないのが、韓日関係の悪化の主な原因ではないか、と思います。1990年代後半以降、日本での国家主義がますます勢いづきました。安倍政権は特に歴史を正しく伝えようとしません。２０年間で大きく変わったんです」。彼は「日本で歴史を正確に伝えようと努力する新聞や学者たちに対する攻撃が激しくなっている」とし「日本でも韓国でも、過去にどのようなことがあったのか正確に知ることが重要だ」と語った。

“歴史の後退”を防ぐためにはどうすればいいのか。「光州５・１８も、歴史から消そうとする動きに対抗して市民たちの力で正しく伝えている。そのように歴史は継承されると思います。歴史を記録する大きな力は市民の情熱です。メディアも大事です」

次の作品は在日コリアン問題を扱うことになりそうだと話した。「後続ドキュメンタリーのテーマに韓日関係を考えています。具体的に、在日コリアン問題を調べようと思います。これからも、日本の国家権力が伝えていない歴史を取りあげるつもりです」。

彼の作品を狙った圧迫があったのか気になった。「権力側の圧迫はまだありません。ただ、ドキュメンタリー製作を引き止める声を周りから聞くことはあります。私が『侵略戦争』という表現を使ったことで批判を受けたりもしました。今、日本の若い人たちは日本が過去に東南アジアに植民地を持っていたという事実を知りません。国家権力が伝えないからです。だから侵略という表現も納得しないのでしょう」カン・ソンマン先任記者

（お問い合わせ japan@hani.co.kr ）

映画「標的」にご支援をお願いします。
制作趣旨、映像の短縮版、寄金申し込み方法などプロジェクトの詳細はhttps://a-port.asahi.com/projects/target/からご覧ください。

道内各地、東京、九州石川などから寄せられた「植村裁判の公正な判決を求める署名」１万３０９０筆は、４月２５日、植村さんと支援メンバーが札幌高裁事務局に提出しました。（撮影：長谷川綾さん）

本 BooKs

堀田善衛　乱世を生きる

水溜真由美著　ナカニシヤ出版
4,104円

２０１１年３月に起きた福島第一原発事故をきっかけに原爆文学を読み直す機運が高まり、堀田善衛の「審判」について論じてみたいと考えるようになったという水溜真由美さん（北海道大学准教授）が作品を網羅的に読み込み、「乱世を描き、乱世をにおける知識人のありかたを問い続けた作家」の再評価を目指した労作です。

堀田は、「広場の孤独」「漢奸」の作品で１９５１年度下半期の芥川賞を受賞。以後世界中の戦乱・争乱の渦中における人間を冷静にみつめ、国家や宗教と人間の自由や自立をテーマとした多くの作品を世に送り出しました。

著者は朝鮮戦争を描いた「広場の孤独」や広島の原爆がテーマの「審判」、南京大虐殺を中国人の視点で書いた「時間」などを軸にして、堀田が乱世をどう描いたかを丁寧かつ簡潔に分析しています。

研究書にも関わらず、難しい言葉を排除して出来るだけ、一般の人でも読みやすい文章でありがたかったです。特に「審判」が、原爆投下の罪と裁きの問題を扱った壮大な思想小説であること、戦争の罪の裁きをめぐる多様な考え方や視点を提起していると論じて、当時としては先駆的だったと堀田文学の神髄を知った気がして是非読んでみたいと思いました。

著者は帰還兵のトラウマが「心的外傷後ストレス障害（PTSD)」として広く認知されるようになるのはベトナム戦争後であり、「審判」が発表された当時、この問題は日本はおろか海外でも十分に理解されていなかったと論じています。また堀田は「審判」で原爆の使用を人類史のターニングポイントとしてとらえる視点を提示していたという。著者は、２０１１年の原発事故が明らかにしたように、核が人類の生存を脅かすほどの破壊力を持ったエネルギーであるという本質は、「審判」の発表から半世紀以上経った現在も何も変わっていない。しかも、核兵器であれ、原発であれ、核はますます多くの国、地域に拡散し続けている。人類が核を手にするようになったことの破壊的な意味を思い起こすためにも「審判」は読み継がれるべき作品であろうと述べています。

私もどんな作家なのか、少し調べてみましたが著者が語るように、敗戦前後の上海体験と初期の作品に関心が集中していて「審判」について論じたものはありませんでした。スタジオジブリの宮崎駿監督と鈴木敏夫プロデューサーも若い頃から堀田善衛のファンであったと公言しているというので、スタジオジブリのサイトを開いてみました。宮崎駿さんは堀田さんの意見が聞きたかったと書いています。

湾岸戦争について堀田は次のように述べています。「湾岸戦争に対するヴァチカンの見解というのは、簡単にいえば、意思疎通のできない者同士が戦おうとしている戦争であるということです。つまり、一方のイラクは、オスマン・トルコ帝国以来の歴史によって戦おうとしている。ところが、もう一方のアメリカ側は、現在の利害と現在の法、すなわち国連によって戦おうとしている。これでは話の通じようがない。話の通じない者同士が武器をとってはいけない。…私は、この考えはたいへん妥当で、かつ公正だと思いました。だからこそ、話し合いを続けるるべきだ、ということですね」と。

日本は軍事力を増し、自由な言論も保証されているとは言えず、今にも戦争が起きるのではないかと不安になります。

堀田が描いた乱世の時代と、そこに込めた思いは、混迷を極める現代社会を生きる上での「羅針盤」として評価されるべきなのではないかと思いました。

水溜さんが主宰する「読書会」では、さまざまなジャンルの文学を論じています。私も楽しませていただいています。

宝島

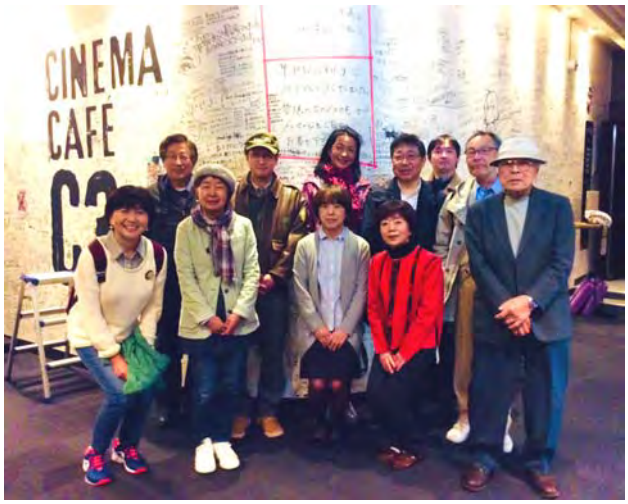
真藤順丈著　講談社
1,998円

沖縄戦で孤児となった幼なじみ３人の男女が主人公で、１９５２年から本土復帰までの２０年間の青春群像記。構想7年をかけた大作です。戦後の沖縄という激しく鮮烈な時代を生きた、市井の人々の息遣いや躍動を伝えます。

米軍との凄惨な地上戦で、沖縄市民は大きな犠牲を払いました。主人公たちは戦後生き延びるために、米軍基地から、食料などの物資を盗みました。「戦果アギヤー」と呼ばれました。３人を結びつけた英雄的存在がオンちゃんでした。オンちゃんも戦果アギヤーですが、物資を私物化せず、弱い人たちに分け与えます。小学校の木造校舎はオンちゃんが米軍の資材場から集めた木材で建てたからです。オンちゃんは嘉手納基地に忍び込んで米兵に追われ行方不明になるのです。抑圧への抵抗、困難を越えていく生命力に圧倒されます。米兵の度重なる暴力事件、コザ暴動なども、物語の一部として語られています。

ヤマコは教師、グスクは警官、レイはテロリストに。沖縄の戦後史がよくわかり、それは今の辺野古新基地問題に直結すると思いました。沖縄ではとてもよく読まれている本というのも納得できます。

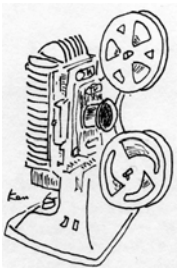
スガイディノスに愛をこめて



５・１２　札幌映画サークルの皆さんと

６月２日に閉館したスガイディノス札幌。札幌駅近くの蠍座が無くなって、通うようになったのがスガイディノスでした。シネコンやキノで上映しないラインナップに感動しました。「セバスチャン・サルガド　地球へのラブレター」は2015年の私にとってのベストワンのドキュメンタリーでしたが、ほとんど知られてなくてたった10数人の観客でした。（後でキノでも上映）「トランボ　ハリウッドに最も嫌われた男」や「この世界の片隅に」「マンチェスター・バイ・ザ・シー」も深く心に残りました。他館よりも韓国映画も群を抜いて多かったですね。若い観客とディノスで一緒に観られたのも楽しかったです。一日も早い再開を待っています。（みな子）

ホワイト・クロウ　伝説のダンサー
レイフ・ファインズ監督



２０世紀を代表する、ソ連のバレエダンサー、ルドルフ・ヌレエフ（オレグ・イヴェンコ）の半生を描いた物語。演じたのは　現役のトップダンサーです。ヌレエフとはアラビア度で「光の」を意味するそうです。

ヌレエフは貧しい農家に生まれますが、幼児のときに観たバレエに惹かれ、１７歳でレニングラードのバレエ団に入団します。指導者に「技術ではなく、どんな物語を語りたいのか」と考えるバレエの大切さを教わります。ひたむきに練習し頭角を現します。

１９６１年、２３歳の時に初めてのパリオペラ座公演で好評を博します。パリの街の文化・芸術に魅せらますが、その行動はKGBに監視されていました。セリフには英語とロシア語、フランス語が混ざり合い、まるでドキュメンタリーのようでした。「自由に生きたい」とヌレエフは亡命を決意します。

題名の「白いカラス」は、はぐれ者のヌレエフのあだ名でした。母を愛し踊った子ども時代。バレエの心を教わった時代。パリの現在。3つの時代を交差させながらヌレエフの人間性に迫ります。ひたすらに回転、跳躍の繰り返しは、美しく命が燃えています。踊ることは生きることでした。パリの空港で、国も家族も捨てる決意に東西冷戦の悲しさが刺さりました。命がけで、自由を望み、芸術を高めようとしたヌレエフの半生に感動しました。

スガイディノス閉館を締めくくる素晴らしい映画でした。もうこの映画館に来ることはないんだと思うといつまでも立ち去りがたかったです。たくさんの映画をありがとう！

マイ・ブックショップ　　イザベル・コイシェ監督

１９５９年イギリスのある海岸地方の町。書店が1軒もないこの町でフローレンス（エミリー・モーティマー）は戦争で亡くなった夫との夢だった書店を開業しようとします。しかし、保守的なこの町では女性の開業は受け入れられず、住民たちはフローレンスの行動を冷ややかに見つめるのです。４０年以上も自宅に引きこもり、ただ本を読むだけの毎日を過ごしていたブランディッシュ（ビル・ナイ）と出会ったフローレンスは、彼に支えられ書店を軌道に乗せるのです。そんな中、彼女をよく思わない地元の有力者夫人が書店をつぶそうと画策します。負けはしたけれど誇り高く信念を貫いた女性の物語です。

フローレンスとブランディッシュが書物を通じて互いをリスペクトする関係性が美しい余韻を残します。人と人との出会いと同じように、本との出会いも一期一会。１冊の本がひとりの人生を変えるものになるかもしれません。私にもそんな経験がありました。

フローレンスの書店に通ってくれた少女クリスティーンは読書は嫌いと言っていましたが、最後の場面では本を抱えていて、この映画はクリスティーンの物語でもあったことに気が付きました。とりわけ焚書をテーマとする「華氏451度」の登場は街の書店を守り抜くことのシンボルとしての意味が込められていました。本を愛する思いがしっかりと引き継がれているラストに感動しました。映画館を出てから気になって、私も「華氏451度」を買って読みました。そこでも少女が大きな役割を果たします。

フローレンスのリバティ柄の洋服が素敵。本屋の中の家具や小道具たち、ずらりと並ぶ本たち、本の梱包を解く瞬間、お茶の時間の食器の音やミルクティの入れ方。どの場面も素敵でした。フローレンスの夢が破れたとしても、夢は引き継ぐことができるのですね。

イザベル監督は「志や信念が次世代につながるように、この映画に希望をこめた」と語っています。

福島は語る　土井敏邦監督

東京オリンピックを目前に控え、福島の原発事故が忘れ去られようとしていると感じた土井敏邦監督。被災者たちに取材し彼らが心の底にためている思いを聴きとったのが本作です。

土井さんは、私も読んで感動した、ノーベル文学賞を受賞したアレクシェービッチの「チェルノブイリの祈り」の心に深くしみいる言葉に影響を受けたそうです。

仮設住宅に住み、夜一人の孤独と向き合いながら「どうかいままでの時間を返してください」と東京電力への怒りを詩にこめる男性。他県に避難した生徒たちに学級通信を送り続け、「放射能が移るから来るな」とか「お前の持ち物は全部貰い物だろ？」と差別を受けていることを知った小学校教師の証言。家業を軌道に乗せ、希望を託していた息子に事故後に発症した鬱で先立たれた悲しみを語る元石材加工業者など、一人ひとりの表情や言葉から、彼らの思いがひしひしと伝わってきて、証言する人と一緒に私も泣きました。

こんな深いドキュメンタリーは久しぶりに見ました。監督の顔は映りませんが、信頼関係がなければここまで自分をさらけ出せなかったと思います。福島に残った人々の真実の声を初めて聴いたように思います。福島を語っていたのは、人々だけではありません。福島の春夏秋冬の四季の美しさにも目を奪われました。エンディングの「福島よ」が福島への愛があふれ、また涙でした。

帰りに買ったパンフレットに、飯館村のドキュメンタリーを制作した飯田基晴監督が「自らの内面、社会を深く見つめた、この証言記録は、きっと架け橋となる。自らに誠実に向き合った言葉は他者の心にも響く」と語っています。

このドキュメンタリーは当初、一日だけの上映でした。しかし、入りきれないほどの観客で、私も２度目の上映でようやく観ました。その後GWでも上映され大きな反響を呼びました。是非、各地に広がってほしいと思います。

カレーライスを一から作る　前田亜紀監督

「グレートジャーニー」シリーズで知られる探検家・関野吉晴さんが大学の課外ゼミとして行った活動を追ったドキュメンタリー。

「モノの原点を知ることで社会が見えてくる」と考える関野さんは、学生たちに色々なことに気づいてもらうべく、野菜や肉、米、スパイス、塩さらには器やスプーンに至るまで、カレーライスに必要なすべての材料を一から自分たちの手でつくるという途方もない計画を発案。集まった100人以上の学生たちと、９ヵ月にわたる試行錯誤を経てカレーライスを完成させます。学生たちが野菜づくりに悪戦苦闘する姿や、食べるために飼育した家畜を殺すべきか悩む姿を通し「食べる」「生きる」という人間にとって当たり前の営みを見つめ直していきます。

豚を屠る（ほふる）ことを生業にしている人の話を聞く場面が秀逸でした。ペットが死ねば悲しいけれど私たちは「たくさんの命」を食べて自らの命を紡いできたことに気づきます。鳥を締めるシーンでは思わず顔をゆがめてしまいましたが、同時に命をいただいているんだなぁと初めて実感しました。

自分ですべてを作って見ると、安全で安心な食べ物が、いかに時間と手間がかかるのかがよくわかりました。美術大学の学生さんたちから、農業をやりたいという人も出てきたというのも嬉しいですね。

記者たち　衝撃と畏怖の真実

ロブ・ライナー監督

イラク戦争の大義名分となった大量破壊兵器の存在に疑問を持ち、真実を追い続けた実在の新聞社「ナイト・リッダー」の記者たちの奮闘を描いた作品です。監督は「スタンド・バイ・ミー」を映画化したロブ・ライナーです。ナイト・リッダー社のワシントン支局長も演じました。

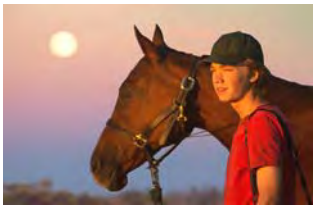
映画は２００１年９月１１日の同時多発テロから始まります。国民の怒りをうまく利用してブッシュ大統領は「大量破壊兵器保持」を理由にイラク侵攻に踏み切ろうとします。世間に戦争はやむなしという雰囲気が作られていきます。ナイト・リッダー社ワシントン支局ウォルコット支局長は、真実を探るためジョナサンとウォーレンに取材を命じるのです。

ジョナサン・ランデーを演じるウディ・ハレルソンが、国家安全保障担当の特派員としてアフガニスタン・トラボラで取材をする場面。米軍キャンプで他の記者がある情報を隠していると勘付き、「ビンラディンを逃してしまった」という重要な情報をつかみます。ニューヨーク・タイムズやワシントン・ポストといった大手新聞をはじめ、アメリカ中の記者たちが大統領の発言を信じて報道を続ける中、地方新聞社を傘下にもつナイト・リッダー社ワシントン支局の記者たちは、大統領の発言に疑念を抱き、真実を報道するべく情報源をたどっていきます。現場をよく知る政府関係者たちに当たり、「大量破壊兵器はない。戦争をしたいだけだ」という事実をつかみます。粘り強く関係者に取材する姿には、記者としての矜持が伝わってきました。映像には、実際のブッシュの演説なども挿入されドキュメンタリーのようでした。一方、大新聞の記事に間違いはないと読者は思い込み、政府の思惑にはめられてゆきます。イラク戦争開戦を阻止することはかなわずイラク人１００万人、米兵３万６０００人以上が死傷。

この大きさにショックを受けました。
　他の新聞社も「ナイト・リッダー」のような取材をしていたらイラク戦争は防げたのではないかと、残念でならなかったです。
　日本のメディアは権力の監視をしているだろうか。政府の意向を伝達だけに終始してはいないかと、この映画を観て不安が増しました。
　記者たちの物語と同時に描写されるのは、イラク戦争に従軍し、1週間後に移動中の輸送車が爆撃されて、大けがを負い、車いすになった兵士の証言でした「イラク戦争を起こしたのは政府ではないか」と責任を問うたのです。
　映画は、「自由で独立したメディアは真実を伝えるために闘って」と訴えます。是非、多くのメディア関係者にも観ていただきたいと思いました。

荒野にて

アンドリュー・ヘイ監督



　ひとりぼっちの１５歳の少年チャーリーが、走れなくなった競走馬のピートと果てしない荒野を歩む物語です。
　チャーリーは物心もつかない幼い時に母が家出し、貧しい父と二人暮らしです。しかし父は仕事で不在がちで、この地に越してきてから、チャーリーは学校にも行っていないのです。ある日、ひょんなことから近くの競馬場で1頭の馬を世話することになります。その馬がリーン・オン・ピートでした。リーン・オンは「寄りかかる」とか「頼る」という意味ですね。ピートに愛情をそそぐチャーリーの優しさと孤独が胸に迫りました。
　父の突然の死で天涯孤独となったチャーリーが、殺処分の決まったピートを盗み出し、疎遠になってしまっているマージー伯母さんが住んでいたワイオミングを目指して一歩を踏み出します。チャーリーの見る大自然は厳しく、これから生きねばならない人生を想像させます。心の拠り所であるピートに、荒野をさまよいながら幼い頃の楽しい思い出や、学校に行っていたころのことなどを語りかけます。こんな豊かな感受性を持ったチャーリーの行く末を案じながら、心のなかで「伯母さんと会えるといいね」と祈っている自分がいました。チャーリーの寂しさが、わがことのように感じられました。それでもチャーリーは、その先に希望があると信じて前に向かって進んでいくのです。はっとするような美しい自然も描かれます。
　そんな少年を見つめるカメラが温かく、優しく、ジーンとしました。街の人々の善意にも救われました。
　多感な少年チャーリーの心情を、みずみずしく、繊細に演じたチャーリー・プラマーが印象的でした。
　私は馬も大好きで、小さな頃、日高の山奥で何頭もの馬を育てながら農業をしていた慈愛あふれる祖父を思い出しました。昼間放し飼いにしていた馬の一頭がいなくなり、夜じゅう祖父が探し回り、見つけた時の安堵した表情が忘れられません。
　冒険物語は私の好きなジャンルです。故郷への郷愁を感じさせてくれ、しばらく余韻を楽しませてもらいました。

作兵衛さんと日本を掘る

熊谷博子監督

　石炭産業の栄枯盛衰を見つめてきた山本作兵衛さんは、その体験を一坑夫の視点からつづった、膨大な絵や日記などの記録を残しました。２０１１年５月に、約２０００点の記録画と６９７点の日記が日本初のユネスコ世界記憶遺産になりました。その貴重な記録画を通して炭鉱に、筑豊に生きる人々を描き、その姿を通じて日本という国を描いたドキュメンタリー映画です。
　作兵衛さんが実際に体験した炭鉱労働なので、絵が細部にわたってリアルです。先山は地底の石炭を掘り、後山の女性は上半身裸で石炭を運び出したのです。命がけの作業でした。二人(たいていは夫婦)の息が合っていなければとても危険な仕事でした。
　１０５歳のカヤノさんの証言と後山の役割が記録画とぴったり一致して、生き生きと伝わりました。日本の経済を支えた黒ダイヤ。しかし、低賃金で過酷な労働で事故も頻発しました。「炭鉱は日本の縮図」だと語った作兵衛さん。映画は炭鉱町に生きた人々への温かい視線と、丁ねいな取材でそれぞれの人生が描かれていました。同時に形を変えて過酷な労働状況は、現代日本に繋がっている事を静かに訴えています。命を削って日本を支えた人たちを伝える作兵衛さんの記録画は、未来への伝言です。

２１３号の発行が大変遅れました。家にこもりがちでしたが聖書に出会い、辛さから立ち上がる勇気をもらいました。（み）

購読料と寄付をありがとうございます（敬称略）
３．２７～５．２９

高島道　大関裕美子　仲俣善雄　新妻徹　吉田真由美・赤石としあき　高橋儁　及川文　佐藤晃一　匿名　福原正和　合田美津子　小川早苗　伊藤牧子　廣瀬功　山口力三　瀬尾英幸　加藤多一　宮本紀子　小澤登美栄　三浦恵美子　佐藤正人　森隆子　林恭子　藤田トシ子　神原照子　高橋儁（切手）計69,000円とレイチェル・カーソン会と植村裁判を支える会で印刷通信1部100円で61部6,100円　合計75,100円は印刷と送料に使わせていただきます。切手と合わせてありがとうございます。
郵便振替をご利用ください。「銀河通信」０２７４０－７－５６５３５